
ウメオ留学体験記

水野 裕理
Umeå University

私は細胞科学研究財団より育成助成をいただき、2025年4月より、スウェーデンのウメオ市にあるUmeå University Department of Clinical Microbiologyにて、Postdoctorの身分で研究留学をさせて頂いております。

ウメオは首都ストックホルムから飛行機で1時間ほどの、スウェーデン北部に位置する、北部では最大規模の都市です。市内にウメオ大学とSLU(The Swedish University of Agricultural Sciences)があるため、市の人口約12万人のうち、約5万人は大学の学生や職員が占めているそうです。大学から徒歩1時間圏内に大体の施設が揃っているコンパクトな都市で、治安も良く、住みやすい場所です。

ウメオ大学では、トランスサイレチン(TTR)に関する研究を行っています。北部スウェーデンでは昔から、TTRとTTRアミロイドーシス(ATTR)の研究が行われていました。治療として肝移植が世界で初めて行われたのもスウェーデンです。というのも北部スウェーデンには日本やポルトガルと並び、V30M変異型ATTRの大規模な患者集積地があるためです。因みに地元では「Skelleftesjukan」という病名で知られています。

私は国外で研究を行うのは今回が初めてなのですが、機器や試薬などの多くは日本と同じも



ラボがある建物の外観

のが使われていたり、逆に日本製の製品が導入されていたりもして心強かったです。組織のシステムについては、Department of Clinical MicrobiologyはDepartment内に大勢のPIが所属していて、個々で研究グループを持っており、また研究棟では異なるDepartmentの研究グループが、MD・non-MDの区別なく隣り合って配置されています。

そのため、複数の研究グループ間で実験や研究テーマを行うという方法が日常的に行われており、私も現在、いくつかの共同研究のプロジェクトに属して研究しています。結果、培養細胞・TTR蛋白質・患者さんの検体などを使って、バラエティに富んだ実験が出来ていますので、流動性の高い良いシステムだなと思います。また、ウメオ大学が留学生の受け入れを積極的に行っているからなのか、本当に様々な国籍の研究者がDepartment内にいます。研究時間については朝の開始時間が早く、代わりに皆さん夕方5時頃には退勤します。また長期の夏季休暇を取るのがスウェーデンの特徴のようなのですが、これは研究者も例外ではなく、7月から8月にかけて、研究棟全体がガラガラになります。初めて経験した時は驚きました。

研究以外の時間は基本的に自宅周辺で過ごしていて、近所の図書館や博物館に行くなど、日本とあまり変わらない日常を送っています。国外で暮らして改めて、日本製品のクオリティの高さと日本企業の努力を感じています。冬はやはり寒くて、市内を流れる大きなウメオ川が全部凍ってしまうのですが、日本から持ってきた防寒具をフル稼働させ、無事に越冬することができました。地元のMidsommarやValborgのお祭りに参加したり、近所の森で野生のブルーベリーを採取したり、冬にオーロラを見たり、世界一臭い缶詰として名高いsurströmmingを食するなど、スウェーデンならではのイベントも体験できました。ウメオ大学内には数名ですが日本人の研究者が、また市内には数十名規模の日本人の地元住民がおられるので、定期的に交流して貴重な息抜きの機会を頂いています。

最後になりますが、本助成を頂くにあたり、ご支援下さいました国際医療福祉大学の先生方及び関係者の皆様に深く感謝申し上げますと共に、細胞科学研究財団の今後の益々の発展をお祈り申し上げます。



ウメオ川からの風景。市内にある教会が写っています。